

産業建設常任委員会調査報告書

1 調査事件

稼げる観光産業づくりについての検証（令和2年3月定例会で報告）

2 調査目的

コロナ禍の影響で観光交流人口あるいは関係人口が極端に減少し、同時に地域内での経済効果も厳しい状況となっているなか、令和2年3月定例会の報告書、「稼げる観光産業づくりについて」に付した意見が、その後の町の取り組みにどう生かされたかなど、その経緯について検証することとした。

3 調査経過

令和4年3月7日（会期中）商工観光課、農林課より聞き取り
令和4年3月29日
令和4年4月13日
令和4年4月20日
令和4年4月27日
令和4年5月17日

4 検証結果

(1) 観光拠点と観光資源

[前回の意見]

観光振興によって経済効果を波及させるには、中心的な役割を担う拠点が必要である。本町の観光拠点としては、余目地域では新産業創造館クラッセ、立川地域では道の駅しょうない風車市場が考えられる。この両施設に加え、風車村や月の沢温泉北月山荘周辺は、魅力ある自然環境を備えており、これらを生かし観光客が自由に訪れることができる、新たな拠点としての整備を図るべきである。

ア 風車村

シンボル風車や天体望遠鏡が撤去され、クリーンエネルギーに対する時代背景も大きく変化してきていることから、風の館としたコンセプトも一定の役目を果たしたものとする。観光に特化した事業展開を強化していくうえでも、風車村周辺には、桜まつりで有名な楯山公園や北館神社などがあることから、一帯の名称変更を検討すべきである。

例えば、周辺を花の植栽等を中心にして、バッテリーカーを利用した子ども広場の充実や家族で楽しめるキャンプ施設等を整備するなど、立川地域の四季を生かした新たな魅力ある拠点づくりを行うべきである。

また、ウインドーム立川は、建物の特長を生かし周辺施設も合わせた利活用について、外部専門家の意見を参考に検討すべきである。

イ 月の沢温泉北月山荘周辺と立谷沢川流域

これらの地域は、国道47号（将来の高規格道路）から清川地区を経由し、さらに

出羽三山、鶴岡市内の各施設や新潟県方面、あるいは酒田市方面へとそれぞれのコースを周遊するルート上にある。

これらを踏まえ、旅行会社等と連携して地域全体を周遊観光の立ち寄り拠点とするなど、特長を生かした、地域を元気にする「観光地域づくり」をコンセプトとすべきである。

一方、月の沢温泉北月山荘周辺および立谷沢川流域は、稼げる観光産業づくりにつながる観光拠点としての可能性がある。大自然や周辺施設との相乗効果を生かすために、専門家による観光調査を早急に実施すべきである。

なお、月の沢温泉北月山荘は、冬季間閉館しているが、冬のイベントには一定の発信力もあり、内外のファンの多くからは再開を望む声もある。町は地域おこし協力隊と連携を図りながら事業展開をすべきである。

ウ 宿泊施設

本町では、稼げる観光産業づくりの戦略として宿泊施設の拡充を掲げている。様々な大会参加やビジネス、あるいは観光に訪れた際に利用可能な宿泊施設が他にもあれば、来町者にとって利便性が向上し、経済効果も期待できる。

本町に宿泊施設を建設したいとする民間事業者がある場合は、企業誘致と同様の施策を講ずるべきである。

[検証の結果]

ア 風車村

風車村については、イベントの会場として毎年度定期的な利用はしていないが、蛍の鑑賞イベント（令和2年度）や教育旅行の農業体験（柿もぎ・渋抜き等）で活用している。現在ここを拠点に活動している風車村エコランド実行委員会をはじめ、関係団体等と連携して様々な事業に取り組んでいる。歴史や自然、スポーツ、交流を楽しむ資源に加え、新たに風車村近くで民間風力発電施設群が稼働した等の状況変化も生まれている。

風車村の近隣には、宿泊もできる農林漁業体験実習館もあることから、その利活用も含め、今後も風車村担当の立川総合支所立川地域振興係と連携し検討していくとしている。

なお、一帯の名称変更や外部専門家からの意見聴取については、令和4年度に策定する第4次観光振興計画において検討するとしている。

イ 月の沢温泉北月山荘周辺と立谷沢川流域

観光協会では、令和3年度より「北月山荘誘客促進事業」を展開し、テントサウナや雪山トレッキングなど、立谷沢地域の雄大な自然を生かした事業を行っている。今後も新たに六淵砂防堰堤ライトアップ等も開催し、北月山荘周辺への誘客を図っていく予定となっている。

北月山荘については、令和4年度より冬季休館期間を短縮し、宿泊受入及び食堂運営を行い誘客促進を図るため、積極的なPRを行っている。なお、専門家による観光調査の実施については費用対効果の点から取りやめているが、令和4年度に策定する第4次観光振興計画において検討するとしている。

ウ 宿泊施設

令和2年度に地方創生推進交付金を活用して「宿泊施設整備促進事業」を実施し、令和3年4月に新設の宿泊施設がオープンした。

町全体の令和3年度の宿泊者数は6,500人程度と見込んでおり、令和元年度(7,203人)には及ばないが、新設の宿泊施設には毎月一定の宿泊者があり、宿泊者数は4,000人程度と見込まれる。このため、全体の6割程度が新設の宿泊施設の宿泊者となっている。

(2) 観光推進体制と魅力の発信

[前回の意見]

ア 観光推進体制

視察した木祖村ややまがたアルカディア観光局(長井市)はもとより、令和元年4月には鶴岡市が日本版DMO登録に向けスタートするなど、観光産業の活性化に取り組む自治体が増えてきている。

将来の観光行政の在り方を、特に経済効果を目的に推進しようとした場合、効果を大きく受けるのは民間である。そのため基本的に主体となる推進体制が、行政から観光に特化した民間の組織へと移行することは必然の動きである。

本町の観光推進体制は、予算措置としては観光協会にあるが、実質的には商工観光課が中心となり進められており、民間が協力するというスタイルになっている。

しかし、稼げる観光産業づくりを目指すためには、事業展開をする際の迅速な判断や多様な組織との調整が欠かせない。

そのためには、法人化が良いのか、あるいは組織改編で対応するのか、「WAKUWAKU やまのうち」のような町づくり会社と連携するのかなど、観光に特化した組織形態が考えられるので検討すべきである。

イ 魅力の発信

(ア) 観光案内の充実

視察地の甘楽町をはじめ、拠点施設には、観光客のためのデジタルサイネージ(電子看板)等による魅力発信を行っているところが多い。本町のクラッセには既に整備されているが、道の駅しょうない風車市場をはじめ、観光拠点となりうる施設にも整備すべきである。

また、観光拠点には、観光ガイドの常駐が望ましい。難しいようであれば、現場のスタッフが対応できるよう人材の育成も検討すべきである。

(イ) 特産品の開発

視察地の甘楽町では、優れた商品を「KANRA ブランド認定商品」として認定し、付加価値を高めることで、地域経済の活性化に取り組んでいる。本町でも、山形県よろず支援拠点の指導を受け、新産業創造協議会のプロジェクトと地域おこし協力隊が開発した「庄内町のほしがきさん」が、2018年やまがた土産菓子コンテストで最優秀賞、2019年新東北みやげコンテストでもデザイン特別賞を受賞し、令和元年12月からはインターネット販売を開始した。

このように6次産業化開発食品を販売ルートに乗せることができれば、庄内町発の特産品としてその魅力を十分発信でき、目指す経済効果も期待できる。本町

でも認定基準を設け、庄内町ブランドを確立すべきである。

(ウ) グリーンツーリズム

風車村の農林漁業体験実習館は、宿泊施設としての機能があることから、町外からの関係人口拡大につながる事業展開が可能である。視察地の「なかつがわ農家民宿組合」の取り組みを参考に、地域一帯を四季折々の自然環境を活用し、教育旅行も含め農業体験プログラム等によるグリーンツーリズムの拠点施設とすべきである。

(エ) 本町のファンづくり

視察地の木祖村では、東海地区村人会の会員として、村出身者以外の方もファンとして登録でき、甘楽町では、友好都市である東京都北区の住民を対象に、公的宿泊施設等の利用料金割引制度を設け、やまがたアルカディア観光局（道の駅川のみなと長井）では、町歩き等の支援をするため、市内の店舗で割引を受けられるサービス券を交付するなど、それぞれが交流人口あるいは関係人口拡大につなげるためのファンづくりに取り組んでいる。

本町でも、東京庄内会や東京都港区白金との交流事業を、庄内町のファンづくりの好機と捉え、視察地の施策を参考に、交流人口拡大や関係人口拡大につながる新たな支援制度を検討すべきである。

[検証の結果]

ア 観光推進体制

観光協会の法人化等については、具体的には検討は進んでおらず、時期尚早であるとの意見もあり、当面は現体制で運営するとしている。

イ 魅力の発信

(ア) 観光案内の充実

デジタルサイネージについては、必要性も含め、各施設と今後検討するとしている。

余目及び清川地区にある観光ガイドの組織については利用促進が図られるように今後も積極的なPRを行うこととしている。現在はクラスセに観光専門員、清川関所に管理人、北月山荘に支配人（協力隊）が常駐し、観光等の問い合わせに対応している。観光ガイドの申込みがあったときは、余目ガイドの会や、きよかわ観光ガイドの会に依頼している。なお、観光ガイドの常駐は難しいが、当該施設の現場スタッフ等の人材育成（研修等）は引き続き行うとしている。

(イ) 特産品の開発

令和4年3月24日を皮切りに、令和4年度より特産品のブランド化を図るために必要な体制などを構築及び地域住民などを対象としたワークショップを開催し、地域資源の掘り起こしや将来ビジョンの策定などを行うため、「地域ブランド創生事業」を本格的に実施する予定である。

(ウ) グリーンツーリズム

農林漁業実習館をグリーンツーリズムの拠点とすることについては風車村担当の立川総合支所立川地域振興係と連携し検討するとしている。

(エ) 本町のファンづくり

今後も首都圏等で開催される物産展等での本町の魅力や特産品等の PR を継続するとともに、交流のある東京都港区等とも連携し、相互の交流人口の拡大を図るための事業の展開も検討している。

また、新たな夏まつり「しょうない氣龍祭」を全国に向け PR していくことで、本町の新たなファンづくりにも取り組むとしている。